

NPO 活動からみた新庄エコロジーガーデン

NPO もがみ理事長
沼野 慈



1. エコロジーガーデンをめぐるこれまでの経緯

エコロジーガーデン「原蚕の杜」とは、山形県最上郡新庄町（現新庄市）が、戦前約 9 ヘクタールの土地を寄付するなどして強力に誘致を図った国の出先機関の跡地である。昭和 9 年に農水省蚕糸試験場福島支場新庄出張所として開設されたのち、東北農業試験場に改組され、曲折を経て平成 12 年 3 月に閉所となった。閉所に先立ち、新庄市と農水省は施設の有効利用策について話し合いを始めており、一方で市民側にもこの施設の有効活用について考えようとの動きが生まれていた。筆者は当初からこれに関わってきたが、その後の経緯は以下のようなものであった。

平成 10 年 11 月には「旧蚕糸試験場を見る会」が開かれ、参加者の中には蚕糸試験場跡地に残された環境資産がもつ魅力を極めて高く評価した市民もいた。この会では、場所そのものの魅力、地域にとっての物語としての魅力、地域の将来に向けての情報発信源としての力等多面的な価値の存在についても語られた。

平成 12 年秋から「旧東北農業試験場跡地利用に関する市民懇話会」が設置され（5 回開催）、「東北農業試験場の跡地を考える市民の集い」を開くなどの経過を経て、平成 13 年に「基本構想」をまとめて市長に報告した。老朽化している建物や樹木は除去した方がよいという委員もいたが、全てを現状のままに市に移管することを、懇話会は結論づけた。

当初、市や議会には新興住宅地としての利用案もでており、農水省からは「更地にして引き渡しましょうか」との打診もあるなど、行政側の動きは予断を許さないものであったが、「基本構想」の示した方向性はその後の展開に大きな役割を果たした。平成 14 年には、現状に大きな手を加えることなく、産直施設と大学連携研究施設を軸に、現名称が付与された農業振興・交流施設が暫定的にスタートした。

その後平成 22 年に、市役所各課の課長で構成された「エコロジーガーデン利用計画策定委員会」が発足し、行政主導の計画が進められていく。筆者はこれまで 2 度のパブリックコメントに、大学連携はもとより、地元の中高生と連携を積極的に強化し、地力をつけ次代の担い手になる市民を育てる場とすべし、などの提言をおこなってきた。

この跡地利用状況は、山形経済同友会の人々と景観の関わりが織りなす情熱的な地域づくりを顕彰する「地域づくりのやまがた景観賞」大賞の受賞にもつながっている。しかし、「基本構想」では理念面での上位計画を自然との共生をめざす「最上エコポリス構想」に基づく述べているにもかかわらず、行政の現場職員にこのことが浸透しているとは言い難い現状にあることも事実である。

平成 25 年 3 月には、旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン）が登録有形文化財（建造物）に登録された。建築物群としての歴史的・文化的意義が認められた

形だが、登録有形文化財の精神である保存と活用の両立に弾みがつくことを期待している。その一方で、活用が知らず知らずに周辺環境を含む「場の価値」の保全に悪影響を及ぼすことのないよう、留意を怠らないように心がけたい。

2. 活動内容の紹介

筆者が関わっている、エコロジーガーデンを舞台としている活動について紹介する。

2-1 グラウンドワーク新庄

グラウンドワーク新庄は、全員がシニア世代以上の生涯現役を貫いている市民で構成されている。環境活動団体等のゆるやかな連携体で活動が続け、事務局長は OB となった行政担当者が務めている。

団体設立以来、毎年「夏休みちびっこ寺子屋＝おもしろ昆虫教室・セミの幼虫探し」で子どもと親に体験と思い出づくりを提供し、エコロジーガーデンの魅力を体感し、自然に抱かれ自然と共にある自分に気づいてもらう仕掛けづくりを担っている。

山形新聞の記事（平成 16 年 4 月 29 日）には、『「注目官民連携の新技术」知恵と汗を出し合い 親しみやすい施設に』の見出しで、「住民と企業、行政が連携したグラウンドワーク手法による環境整備がすすんでいて、住民に親しまれる施設として徐々に命が吹き込まれつつある。民間と行政が知恵と汗を出し合うグラウンドワークの取り組みは、これからの地域づくりの姿として注目されている」「行政任せではなく、地域を構成する住民、企業、行政のパートナーシップによるグラウンドワーク。自分たちの財産という意識を持ってそれぞれが主体的に関わり合える地域づくりの手法としてさらに広がっていくことを期待したい」と応援メッセージが書かれている。

開園間もない頃の市民への呼びかけ「エコロジーガーデン市民グループ夢構想～みんなで楽しい将来像を考えてみませんか！～（平成 12 年 2 月）」で、市民がエコロジーガーデンの未来について思いを巡らせ「こうなったらいいな」をまとめた記録がある。その記録には、「産地直売所や農家レストランがあるといいな」「指首野川から水を引き、ホテルの里のような空間を作りたい」「バイオマスエネルギーの体験学習イベントやランドスケープアート展を行える場所にしたい」など市民の思いを描く様々な夢が詰まっていた。これらは今、「あれから 10 年、夢構想こんなに実現しています。→今後実現することがあるかも…！！」の見出しでエコロジーガーデンの管理棟の廊下に貼り出してある。

2-2 エコロジーガーデン交流拡大プロジェクト（利用 8 団体で構成、事務局は市）

エコロジーガーデンの施設の永続的な保存と地域内外の人々の友好的な利活用を推進し、多くの人が集い市民に開かれた施設としていくため、定期的にイベントを開催し交流の拡大を図ることが目的である。

主なイベントは、青山学院大のフィールドワーク、かかしまつり、キトキトマルシェ、キトキト環境芸術祭、グラウンドワーク夏休みちびっこ寺子屋等である。また、この 6 月にはシルクロード・ネットワーク・フォーラム in 新庄を初めて開催した。

キトキトマルシェは、「買うだけじゃない。売るだけじゃない。手作りされた物を通して人と人が触れあう場所。そして時間。」をコンセプトに、雪のない季節に定期的に開催している。ちなみに、キトキトとは蚕が桑の葉を一斉に食べる時に出す音の擬音（オノマトペ）であり、「新鮮な」という意味ではない。平成 27 年度の実績は、集客数 10, 150

人（前年比 14% ↑）出展数 258（25% ↑）売上額 8, 262, 000 円（32% ↑）となっている。

2-3 NPO もがみ

平成 11 年地域の活動者達で任意団体として発足、その後、「1 人ひとりの力を、新しいもがみの力へ」を合い言葉に平成 15 年に NPO 法人化し、地域社会の熟成に寄与したいとの願いで NPO や地域活動のための中間支援組織としての活動展開を図っている。設立当初からエコロジーガーデンの建物に事務室を置いている。

かつてはメンバーで「もがみエコポリシアンのすすめ」を冊子にしようと盛り上がったが、発刊する予算がなく内部だけの「幻の冊子」に終わってしまったこともある。平成 23 年度には、「新庄のまちなみを未来につなぐプロジェクト」で、子どもも巻き込むエコロジーガーデンの価値を市民に伝え認識する仕掛け事業に取り組んだ。

3. 最上エコポリス構想と住民

筆者の周囲で進んで地域活動をしている人々をみると、自分の暮らす地域が大切だと思ふ人ほど、地域のことを知り次世代に伝えようとしているのがわかる。地元に対する思いが深い人ほど、見る目があるとつくづく感じる。

そうした人々の価値基準の真ん中にあるものは何か。環境資源や自然環境の価値を改めて認識し、恩恵を受けその喜びを分かち合い、自分の暮らしにいかす、ということではないだろうか。この地域には自然の中で育ち合う幼児教育を実践する認定こども園、地域の自然エネルギー開発による地域内循環をめざす会社、地域資源を保全しビジネスにつなげようとする起業家等が数多く生まれつつある。エコポリスを標榜することはなくとも、実態として地域の主体者・エコポリシアンとして生きる市民達である。彼らは本能的に、この地域の持続はエコロジカルな資産の保全と活用なくしては実現しないと心得ているようだ。

筆者は日頃から、中間支援 NPO 活動を通じて地域の未来を今よりもっと強靱で、もっと暮らしやすくするための架け橋として動くことをめざしてきた。地域課題に対応し、市民力を高めるための事業の展開を現場で預かる NPO を運営するという立ち位置である。エコロジーガーデンという環境資産も、人々の意識を地域の主体者、地域課題に立ち向かう当事者としての自覚につなげていくための効果的な実践の場として位置づけている。



グラウンドワーク新庄による環境整備活動



緑陰のキトキトマルシェに集う人々